

ぶらんこ（一幕）

岸田國士

青空文庫

夫

妻

夫の同僚

茶の間 朝

妻 (チャブ台の上に食器を並べながら) あなた、さ、もう起きて下さい。

夫 (奥より) 起きてるよ。一体何時だい。

妻 毎朝、わかつてるぢやありませんか。

夫 そんな時間か。

妻 いやね、どんな時間だと思つてらつしやるの。

夫 (跳ね起きるらしく) さうか。(間) カマキリは、まだ来ないだらう。

妻 (あたりに気を兼ね) およしなさいよ、そんな大きな声で……………。

夫 (現はれる) 昨夜はね、素敵もなく面白い夢を見たよ。

妻 （相手にならず） 齒磨のチューブが破れてるから、気をつけて頂戴。

夫 （台所へ行きながら） 鼠は出なかつたかい、昨夜は。

妻 （相変らず膳の上に気を取られて） あなた、昨日の朝、何処へお置きになつたの。

昨夕お湯へはいらつしやらなかつたし……。

夫 （楊子を使ひながら） 今日は、一つ、風呂へはいるかな。

妻 もう駄目ね、一昨日の牛蒡は……。

夫 さあ……。おれも、今迄、いろんな夢を見たが、これくらゐ不思議な夢を見たことがない。

（間）

実に愉快な夢なんだ。

妻 手拭はあつたの。

夫 あつた。

夢だからつて馬鹿にはできない。

おれが、かう云ふと、お前はすぐに、夢があてになるもんですかと来る。

それや、夢で金持ちになつたからつて、何も、ほんとに、金持ちになると限つちやゐな

いさ。

そんなことを、あてにする馬鹿があるもんか。

(間)

夢は、どこまでも夢さ。

それでいいんだ。

ところで、夢といふやつは、空想とは、また違ふんだ。

夢は、やつぱり、一生のうちで、実際に在つたことなんだ。

眠つてゐる間に、ちやんと起つたことなんだ。

妻 葱が煮え過ぎても知りませんよ。

夫 葱……今日は、葱の汁か……。

さうか。

(顔を洗ふ音。やがて、手拭で顔を拭きながら現はる。

妻は、入れ違ひに、台所から釜を提げて来る)

妻 お櫃をもう一つ買ふのね。

夫 （手拭を釘に掛け、長火鉢の前にすわり）煙草を一つぶく喫ひたいな。

妻 いいわ、時計と相談してね。

夫 （煙草に火をつけながら）まだ大丈夫。（外を見るやうにして）好い天気だな。

（間）

つまり、夢に対するおれの興味は、夢そのものの面白さに在るんだ。

妻 （飯をよそふ）

夫 夢は、おれを退屈さから救つてくれる。

夢は、おれに、人生の木陰を教へてくれる。

妻 （汁をつける）

夫 昨日と今日……今日と明日……その間に、おれは金のかからない旅をする。

楽しい旅だ。

おれに取つて、夢は、現実の一部なんだ。

希望だとか、理想だとか……そんな空虚なもんぢやない。

妻 （箸を取り上げ）あなたは、よくさう、夢が見られるのね。

夫 羨ましいか。そこで、昨夜の夢だが……（箸を取る）

妻 その前に、此の間の出張手当を、早く取つて来て頂戴。

夫 あ、さうさう。九円七十銭……こいつこそ、夢でもいい……と、思ふのは間違ひで、今日は、是非、取つて来る。

(沈黙)

妻 今朝は、卵なしよ。

夫 どうして。

妻 買つとくのを忘れたの。

夫 よし、さう出なくつちや……。

「忘れた」

何んといふ好い言葉だ。

一切の醜さ、一切の暗さ、一切の苦しみ、恐ろしさを覆ふ言葉だ。
忘れてくれ、忘れて……何もかも、忘れてくれ。

妻 (きまりわるさうに) あら、ほんとに忘れたのよ。

夫 ますますいい。(間) それに、今日の飯は、上出来だ。

妻 (強いて笑顔を作り) 炭がね……。

夫 （妻の顔を見て）あ、ほんとだよ。

妻 さう？ ……（涙ぐむ）

夫 馬鹿、馬鹿……お前は、夢を見ないから、いけないんだ。

たまに見れば下らない夢しか見ない。

妻 だつて、どんな夢が面白いんだか、わからないんですもの。

夫 なるほど、いつか話した夢は、あんまり込み入つてて、お前にはわからなかつた。

わからなかつたから、面白くなかつたんだ。

昨夜のは、きつと、わかる。わかるやうに、話してやる。

お前は、おれの妻だ。おれが、どんな夢を見たか、

それくらゐのことは、知つてなけれや。

妻 （夫の茶碗を取り、飯をつける）たくさんつけてよ。

夫 おい、おい。

妻 また、お昼までに、お腹が空くわよ。

夫 （茶碗を受け取りながら）それは、まだ、おれが小さい時分のことらしい。

小さいと云つても、十六か十七……

変に世の中が寂しい頃だ。

(間)

いつも云ふ通り

おれには、友達といふものが無かつた。

遊ぶと云へば

一人で

蜻蛉を捕るか

冬なら

日の当る裏山の斜面で

遠くの森を

毎日毎日

絵にかく――

それが楽しみだつた。

妻 いやよ、そんなに、おしたち醤油をかけちや。

夫 おれは、子供の時分、よく醤油を、飯にかけて食つたよ。

妻 毒だわ。

夫 お前は、何んでも、毒にしちまふね。

そこで、その夢だ。

おれは、あてもなく

その森の中へ、はひつて行つた。

毎日、絵にかいた、その森さ。

夜なんだよ。それがね。

妻 それより、こつちのが漬かり加減よ。

夫 夜なんだ。それが……

奥へはひつて見ると

森は——その絵にかいた森は

とてつもなく、大きな森なんだ。

露西亞か、南米か……

そんな処に在りさうな

人跡未到の大森林さ。

妻 (何か云はうとする)

夫 まあ、黙つて聴いてろ。

夜なんだけ、それが……。

おれは怖いとは思はなかつた。

ちつとも怖いとは思はなかつた。

ただ、むやみに、悲しかつた。

おれは、不図、自殺を思ひ立つた。

妻 もう沢山、そんな話は……。いいの、あなた、そんなにゆつくりして……。。

夫 いいから、しまひまで聴け。

自殺を思ひ立つた。

そこで

一本の樹の枝を見つけて

それへ帯をひつかけた

頭の上で、その両端を結びつけ

いよいよ

首を吊らうとしたんだ。

妻 （顔をそむけ）あなた！

夫 いいか

するとだよ……

すると、誰かが、後ろから、おれの肩を叩くぢやないか。

妻 人がゐたの。

夫 人もんか。可愛い娘さ、それがね、十二三の……。

笑ひながら、おれの顔を見てるぢやないか。

（間。妻は夫が膳の上に置いた茶碗を取つて再び手に持たせる）

見てるんだよ。

どつかで会つたことがあるなあ——

さう思ひはしたが、どうしても思ひ出せない。

妻 あとで、わかつたの。

夫 待て待て。

（急いで飯をかきこみ）

すると、向うから、馴れ馴れしく

——何にしてるの——つて訊くんだ。

おれは

ブランコをこしらへてるんだつて云ふと

——ぢや、一緒に乗つて、遊びませう——つて云ふから

おれは

帯が、これぢや、短か過ぎるつて云つたんだ。

妻 (吹き出す) そんな……。

夫 (真面目に) さう云つたんだ。

(間)

すると

——そんなら、あたしのを繋ぎませう——つて

メリンスの、赤い帯をほどくんだ。

妻 (笑ふ) いやよ。

夫 ほどくんだよ。

（間）

仕方がないから

ブランコをこしらへて

二人で乗つたよ。

（間）

木の幹がぐらぐらと揺れる。

頭の上で、だしぬけに、けたたましい羽ばたきが聞えたと思ふと……森中の鳥が、一どきにガヤガヤと啼き出した。

二人は

思はず、ブランコの上で抱き合つたさ。

妻 （やや暗い顔になり）もう、お茶……？

夫 お茶だ。

（間）

お茶だけだ……

それから先さ、面白いのは……。

妻　ぢや、その先は、今夜ね。もう、靴を穿く時間よ。

夫　今日は、ブルドツクにしよう。磨いてあるね。

妻　（起ち上つて洋服を出す）

夫　（それとなく、妻の方を見ながら）その時だよ、その娘の顔を、よくよく視たのは。

わからない。が……誰かに似てるんだ。

どこかで見えたか、会つたか、話しをしたか……。

妻　（靴下を検めながら）今日は、何処へも上らないでせう。

夫　上らない……つもりだ。む、待つてくれ……よし、上らない。

兎に角

何時か、何処かで、どうかした女なんだ。

誰だと思ふ。

妻　わかつてますよ、そんなこと、さ、また、待つて頂くのは、お気の毒ですわ。

夫　誰だと思ふ。

妻　誰でもよござんすよ。

あなたは、いつでもよ……朝の忙しい時に限つてそれなんですもの。

晩なら、もつと、ゆつくりするでせう。

夫　ゆつくりする。

しかし、もう、印象が新鮮でない。

頭の後ろの方が、まだ、夢に漬かつてゐるやうな朝の気持……

こいつは、晩まで、もたないよ。

事務所の、埃臭い空気を吸ふと、もう駄目だ。

恐ろしいものさ。

帰つて来て、お前の顔を見ると、それや、元気は出る。

元気は出る……が、ただそれだけだ。

お前は、あんまりはつきり見えすぎるよ。

（間）

しかし、もう着換へる。

カマキリの奴、今日は遅いぢやないか。

（茶をひと息に飲み干し、起ち上つて、着物を脱ぎ始める）

妻

（手伝ひながら）もう、これぢや暑いわね。

夫 （喉の奥から妙な声を出して唱ふ）

タラ ラ ラ ラ ラ ラア

タララ タララ タララア

タララ ラ ラ

タララ ラ ラ

タラ ラ ラ ラ ラ ラア

妻 （服の塵を払ひながら、優しく放げ出すやうに）

何を無茶苦茶歌つてるの！

夫 無茶苦茶だ？

自分が知らない歌はなんでも無茶苦茶か、

（間）

処で、お前は、わかつてると云つたね。

その娘が、似てゐるといふ女は、誰だ。

をかしいぢやないか……。

だつて、おれが、お前を始めて見たのは、お前が幾歳の時だ。

十九か……

いや、二十か……

さうだね。

お前が十二三の頃は、どんな顔をしてゐたか、それが、おれに、わかる筈はないぢやないか。

妻 写真を見たでせう。

夫 さうか……

なるほどね。

お前は、また、恐ろしく、落つき払つてゐるね。

痛快だよ……しかし……

疑ひも、そこまで、無くなれば。

序に、おれが、どんなに幸福かといふことも信じてほしいね。

妻 あたしも……幸福よ。

夫 うまい、うまい、その調子……。

（間）

いいかい

その娘が、どこか、お前に似てるんだよ。

いいや、それより、お前そつくりなんだ。

つまりお前なんだ。

しかし、そこが、夢の面白い処さ。

おれは、さう気がついて、驚きもしなければ、まごつきもしない。

十六のおれは

十二のお前を抱いて

悠々

ブランコの上で夜を明かした。

妻　　はい、チヨツキ。

夫　　ブランコは

力を入れないでも、楽に漕げた。

(間)

房々したお前の髪の毛が、前にかがむ度毎に、おれの顔に、もつれかかる。

お前は、それが面白いと云つて、わざわざ顔を近づけて来るんだ。

妻 （笑ひながら） まあ……。

夫 ブランコは

ひとりでに、揺れてゐるやうだつた……。

（間）

木の葉を漏れて来る薄明りが

仰向くたんびに

今度は

お前の顔を銀色に染めるんだ。

おれは

貪るやうにお前の眼を見つめた。

……お前は、やつぱり、笑つてゐるんだ。

妻 （夫の肩に頭をもたせかける）

夫 が、やがて、お前は、うとうとと眠り出した。

おれも、うとうとと眠り出した。

(長い沈黙)

それから先は、お前が知つてゐる通りなんだ。

勿論、世界は、丸で違ふさ。

(間)

さうさう、覚えてるかい……

あの翌朝、おれたちは、すぐ、この家へ引越して来たね。

なんだ、これや(部屋ぢうを見廻す)

これでも、人間の住む家か……

人間が愛し合ふ家か。

(間)

処が、昨夜はさうぢやないんだ。

森だと思つたのは、宮殿さ。

ブランコのもりでゐたのは、やはらかな、あたたかい、天鷲絨の吊床なんだ。

妻　吊床つて、なあに

夫　吊床を知らないのか。吊床さ、そら……大人の寝る揺ゆりかご藍さ。

妻 宮殿なの……？

夫 うん……。

その宮殿が、決して、ありふれた、お伽噺式の宮殿ぢやない。

（外の格子戸が開く音）

声 おい、まだか。

妻 （惶てて夫の肩より離れ）それ御覧なさい、また遅れたわ。

夫 （惶ててチヨツキの釦をはめながら）いやいや、遅れない。（大声にて）なんだ、

やつぱり行くのか。今日は休むのかと思つてた。

声 どちら……。

（声の主、茶の間に首を出す）

妻 あら、いけません、こんなところへ……。

同僚 おや、もう、帰つて来たのか。や、奥さん、お早う。

妻 いくらせかしても、これですの。

夫 丁度いい。まあ、話の先を聴け。その宮殿と云ふのが、決して、ありふれた、お伽

噺式の宮殿ぢやないんだ。

妻 (上着を着せながら) そこは違ひますよ。もつと上……。

夫 宮殿といふ言葉は悪いかも知れない。一切の装飾が、ただ、住むもののための装飾なんだ。

同僚 面白いぢやないか。しかし、さういふ装飾があり得るかね。

夫 あり得るさ。第一、吊床が奇抜なんだ。そのブランコさ、つまり……。

同僚 どのブランコ……。

夫 どのつて……。

妻 いやな片桐さん、ほん気になつて聞いてらつしやるわ。(夫に) およしなさいよ、

もう、あなた。

同僚 一体、何の話だい。

妻 夢なんですよ、この人の……。そら、例のですよ。

(夫にハンケチ、時計、金入などを渡す)

同僚 なあんだ、さうか。

夫 君は、しかし、夢の面白さがわかる男だ。ただ、自分では、一向、見ないやうだね。

同僚 見ない。処で、奥さん……。

夫 君は、ブランコに乗つたことがあるか。

同僚 ないよ。実はね……。

夫 よしよし、その話は後で聴く。昨夜の夢といふのはかうなんだ。

（巻煙草に火を点けながら）

おれが、まだ、十六七の頃……世の中が、変に、かう、寂しい頃だ。

（玄関の方に行きながら）

それでゐて、いろいろの事を、知るともなしに、覚える頃だ。

（姿が消える）

同僚 実はね、君、弱つたことになつたんだ。

夫の声 弱ることはないぢやないか。

妻 （玄関に出る）

同僚 （起き上がらうともせず、言葉つきは夫に、心持は妻にと云つた具合に）いや、

それがね、急に、国から、おやぢがやつて来るつて云ふんでね。やつて来るのは、かまはないが……。

夫の声 さ、行かう、行かう。

同僚 行くさ。そこで、どうでせう、奥さん、今晚だけ……。

夫の声 いいよ、いいよ、どうにかなるよ。さあ……（同僚の手を引張るらしく）おれの夢を聴いてからにしろ。

同僚 （起き上る。姿がかくれる）それがね、奥さん……。

夫の声 よし、よし、こいつの知つたことぢやない。さ、出る、出る。

妻の声 まあ……（と、何かに驚いて）行つてらつしやい。

（格子の閉ぢる音）

妻 （現はる。長火鉢に向ひ頬杖をつく。ひとりでに、微笑がうかぶ）

夫の声 （やや遠く）そこで、おれは十六の少年だ……。

世の中が

変に……

おい、何処へ行くんだ。

同僚の声 一寸、待て……急用だ。

夫の声 こん畜生……早く、しちまへ。人が来るぞ。

（どちらから始めるともなく、二人の調子外れな口笛が、一つ時、纏れるやう

に聞えてくる

—
幕
—

青空文庫情報

底本：「岸田國士全集」 岩波書店

1989（平成元）年11月8日発行

底本の親本：「チロルの秋」第一書房

1927（昭和2）年6月15日訂正第3刷発行

初出：「演劇新潮 第二年第三号」

1925（大正14）年4月1日発行

※底本の親本は第2刷まで、「岸田國士戯曲集」とされています。

入力：kompass

校正：門田裕志

2011年12月4日作成

2016年4月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ぶらんこ（一幕）

岸田國土

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>